

初めて津軽海峡を渡った年会

福 島 久 雄*

本号の学会記事にもあるように、10月15, 16, 17日の3日間にわたって札幌市の北大クラーク会館で日本天文学会秋季年会が催された。昭和23年4月に東京大学で最初の年会が開かれてから27年、昭和43年に北海道支部ができてから7年目に初めて年会が津軽海峡を渡ったわけである。私が日本天文学会に入会したのは昭和4年のことで、天文月報が長い間毎月の天象案内図を表紙にしていたのをやめて薄紫色の若々しい表紙に変わったのがそれから一年の後であった。以来45年、主に天文月報を通して天文学会をみて来た私にとって海を渡った初めての年会はまさに画期的なできごとであって、大野教授、坂下理事初め支部のスタッフの方々の御苦勞に感謝する次第である。現在の本道在住の会員は50名位であるがこれが直接あるいは間接によき刺激となることを期待したい。

本会の年会を天文月報の記事から拾ってみると、昭和23年4月東京大学で初めて開かれてから昭和24年以後は春秋2季に欠かさず開かれており、札幌の年会は春季秋季を通じて55回目、秋季年会としては27回目になっている。他の学会に多くみられるように春季の年会は毎年東京で、秋季の年会は東京以外の支部所在地で開かれており、本会の場合は京都、水沢、仙台が大体において交替して開催地となっているが、近年は上記以外の地でも開かれる例が多くなった。従って開催地の点からみると春季の東京28回、京都1回、秋季の京都9回、水沢6回、仙台6回となり、他に高松2回、諏訪、豊橋、高山各1回ということになる。札幌はこれらの地よりも東京を距ること時間的にも距離的にもレコードであって、予想外に盛会に終ったことは会勢発展の一面とも見られるであろう。会員の一人としてこの上ないよろこびである。

しかし立場をかえて北海道の側から、また範囲をひろく天文学関係の学会とすれば今回の年会は必ずしも津軽海峡を渡った最初のものではない。戦前において今の日本数学会と日本物理学会とが分離する前には、日本数学物理学会があって毎年一回の年会に研究発表の講演が行われた。数学・物理学・天文学・地球物理学などの部門に分かれ後には原子核及び宇宙線の討論会なども加えられるようになった。もちろん規模は現在のものに比ぶべくもなく、天文学の部会も昭和18年7月の仙台の年会が最も多くて30件であったがそれ以前はいずれも20件以内に止っていた。この会は直接に天文学会とは関係がない

ようであったが、いわば現在の天文学会の年会の前身ともいべきものであったと思う。その数学物理学会(略して数物と称した)の昭和12年度の年会は海をこえて北大の理学部で開かれたが、これは北海道での最初にして最後の数物年会であった。たまたま私は物理の学生の一人として大先生の発表論文のお手伝いやら当日のスライド係りやらで忙しい、しかし楽しい数日を過ぎたことを憶い起こす。この時の天文学部門の講演は惜しくも僅に4件、まず当時東北大に居られた小貫先生の宇宙膨張論における Energy-Momentum Tensor について、次に田中務、小穴純、近藤正夫三先生による太陽コロナの連続スペクトルについて、次に鈴木敬信先生の1936年北海道日食に撮影した閃光スペクトルについて、第4に同じく

	春 季	秋 季
昭23	東大理・京大理	
24	東大天文	水沢(緯)50周年
25	"	仙台 東北大
26	"	京大理(宇)
27	"	水沢緯度観測所
28	"	京大理(宇)
29	"	仙台 東北大(金研)
30	"	京大(宇)
31	東大(理2)(科博)	水沢緯度観測所
32	"(科博)	京大(理)
33	東大(医・理)(科博)	仙台 東北大(金研・理)
34	東大(理2)	高松市(香川大)
35	"	京大(宇)
36	建設省地理院・東大理2	諏訪市教委
37	東大(医)	水沢緯度観測所
38	東大(医)	仙台 東北大
39	東京科博	京大(経済)
40	東大(理2)	東北大(金研)
41	"	京都府立勤勞
42	"	水沢緯度観測所
43	"	京都府立勤勞
44	東京科博	仙台市(宮城医会)
45	東京文京区民センター	京都府立文化芸術会館 ホール
46	東大(理2)	豊橋市民文化
47	"	水沢市農協ホール
48	"	高松市(香川大)
49	"	高山市グリーンホテル
50	"	札幌市北大

* 北海道薬科大学

鈴木先生の日食の図計算法という講演であった。5番目の宮地先生の経度変化のお話は都合でとりやめとなったと記憶している。2番目の田中先生等の講演と3番目の鈴木先生の講演は、その前年即ち昭和11年(1936年)6月19日に本道のオホーツク海沿岸に見られた皆既日食の観測結果である。この年から昭和38年の網走における皆既日食までの28年間に3回の皆既日食と1回の金環食(礼文島)とがこの小さな島で見られ、わが国では珍しい日食の過密時代を迎えるのである。

その幕を切って落したこの皆既日食は戦前の日本の国力がある意味で伸び切った時で、季節もよく日食の条件も良好だったので、ケンブリッジのストラットン博士を隊長とするイギリス部隊を初め、チェコ、中国、インド等からの外国部隊に加えて国内の多くの大学、研究機関の観測班がオホーツク海沿岸に並び、かつてない賑やかさを呈した。この時上斜里(今の清里)のイギリス部隊には北大から中谷教授が参加し、私も一学生として11cmの木辺鏡を携え、偶然にもその近くで観測の機会をえ、素晴らしい光景に感激した。しかしストラットン博士の計画した観測は皆既の後半は雲に遮られて不成功に終わった。博士はその後札幌に立寄り、北大で一場の講演を残して本道を去った。講演会の中谷教授の通訳で行われ、新緑がようやくその濃さを増した中の理学部大講堂は立錫の余地ない超満員であった。

この日食につづいて7年後の昭和18年(1943年)の早朝、本道を横断する皆既日食があった。時は太平洋戦争の最中であってしかも戦局は低迷の兆が次第にひろがりかけたところであった。しかし東京天文台初め国内の多くの研究機関から観測隊が派遣され、何れも晴天の確率の極めて多い根室方面に観測地を選んで成功したようである。札幌市はちょうど皆既の南限線の内側に位置したがこの南限線を横断する豊平川に沿って小中学生の大縦列を配置し、一定の観測用紙を配って皆既の南限線を細かく決定する試みが行われた。これは新聞社の企画であったが実際にこれを発案し、実行に与ったのは本会々員米田勝彦博士(故人)であったと記憶している。幸いに当日の札幌の朝は雲一つない晴天で観測は美事に遂行されたが結果は簡単でなく皆既とそうでない地点とが若干入りまじったものであった。これは同氏によって昭和18年の数物年会の天文学の部会で発表させている。

その後礼文島を通過した金環食は戦後間もない昭和28年(1948年)5月9日のことで米軍占領下という特殊な状況の下でやはり東京天文台を初めとする観測隊は礼文島に集まり天候に恵まれて成果をあげ、また昭和38年(1963年)7月21日早朝の本道中部を横断した日出帯食も網走その他の数地点で成功をみたことはまだ記憶に新しいところである。

これら一連の皆既日食の観測のため北海道に來往する専門家も多く、中には観測後望遠鏡を残して寄附された方も居られ、その他有形無形の本道文化に残した影響は大きいと思われる。しかしその中でも忘れることのできないのはさらに遠く明治29年(1896年)8月9日にちょうど1936年と同じような条件下に北海道を通過したオホーツク海沿岸の皆既日食である。この観測のためアメリカのアマースト大学からトッド博士の一行が機帆船に器械を積込んで太平洋を横断し、北見の枝幸に観測陣を敷いた他、フランスからデランドル博士、イギリスからターナー教授、わが国からは寺尾寿東京天文台長も來られたがこの日枝幸は惜しくも曇天で観測は不成功であった。しかしこれが縁となって、その後トッド博士から枝幸に贈られた数百冊の書籍を蔵して辺境の地であったが小さな図書館が建てられ、北海道における公共図書館の第一号となった。この図書館は太平洋戦争中の昭和17年夏、山火のためあえなく焼失、今は蔵書目録にその消息を知るのみである。

北大は来年(1976年)創基100年を迎える。懇親会の席上で大野教授が述べられたように、正に99年目にして北大に天文学会の年会が開かれたわけであるが、一世紀前の札幌には電信もなく、有名な時計台の時計の保護のためにその傍に子午儀を入れたドームが建てられた。函館における福士成豊氏の金星日面経過の観測は明治7年(1874年)であるから、北海道の天文観測施設としては第2号になるであろうか。

年会の開催された会場クラーク会館は、もちろんBoys be ambitiousで知られるクラーク博士の記念館であるが、クラーク先生祥伝によれば先生の学位はゲッチンゲン大学でえられた“隕鉄の分析研究”であったのもまた奇しき因縁である。北海道は開発の歴史が浅いにもかかわらず天文関係の資料は100年の中に比較的多いのではないと思われるが、本道で行われた多くの天文現象の観測について語るにはもっと相応しい別の時と所があるであろう。現在天文教育施設の数も10指に余り、これらについては本誌1975年11月号に紹介されている。

極地から上空に流れ込んだ寒冷な気流のために北海道は急速に冷えこみ、北大の緑もあわてて紅葉への衣替えに急いだころ、年会はクラーク会館で予想以上の盛会で行われ講堂には常時60~100名の参加者があった。札幌ビール園での懇親会は出席者150名というレコードを作り、冷たい外気をよそに成吉思汗鍋を囲んで若い人たちの間に賑かな談笑の花が咲いた。会は弓理事長の挨拶に始まり、つづいて大野教授の歓迎の挨拶があった。私は会場の一隅にあって過ぎ去った北海道の天文史を回想しつつ、いくらかの感傷をこめて坂下理事の乾盃の音頭に和したのである。